
ことば、意味、触れる、場

——『コルプス』における身体論と言語について——

市川博規

はじめに

ジャン＝リュック・ナンシーの『コルプス』(Jean-Luc Nancy, *Corpus*, Anne-Marie Métaillé, 1992、以下は単に *Corpus* と省略する) という著作は哲学の書物としては非常に独特な形式のものといえる。この著作は 1990 年にアメリカ・カリフォルニア大学において行われた講演のために準備された原稿をもとに題目ごとに分けて記述された書であり、講演の二年後に発表されたものである。しかし、題目ごとに分けられたと言っても、それはいわゆる断章と呼ばれるような形式で綴られたものであり、各章(おそらく章と呼ぶのはふさわしくないが)は論の進展の順序を追って繋がっているわけではなく、様々な文脈の議論が横断的に、あるいは分裂しながら、展開されている。一般的には身体論と解されることが多いが、しかし、複数のテーマが、唐突に現れたり、中断されているようにも思われるかたちで、ときに交差したり、ときに並行していたり、と複雑な構造をしているといえよう。つまり、身体論でもあり共同体論でもあるようにも見え、あるいは言語について、意味について、キリスト教について、等々さまざまなテーマを中心にすえて読むことができ、それゆえ、その独特な記述のスタイルゆえ、書物全体を通して一貫した解釈が困難であるとされている。この著作を本発表では身体と言語についての記述に着目して論じ、身体論と言語について、という一筋の解釈を提示することを試みる。そのことで、ナンシーの語る身体というものについて明らかにし、そして彼の哲学における言語というものの重要性に接近することをめざす。

また、なぜ言語について着目するのかということ、それは『コルプス』という著作のナンシー哲学全体における立ち位置を検証するためである。初期の『エゴ・スム』(Jean-Luc Nancy, *Ego sum*, Flammarion, 1979.)以降、ナンシーはあまり身体というテーマについて重点的に語ることのなかった(特に、1980年代は主に共同体について論じていた)ため、身体論と目される『コルプス』は、著作間のつながりからみるとやや浮いて見えるといえる。この『コルプス』の時点から新しく身体論を展開し始めたともいえるが、ここでは彼の哲学展開の連関の検証を試みたい。それゆえ今回は、ナンシーにおいて(ドイツ・ロマン主義について論じた)『文学的絶対』¹(1978)以降、一貫したテーマのひとつである言語に着目して『コルプス』を論じる。すなわち、ナンシーの言語についての思考がこの著作において身体論まで拡がって展開されているのではないか、という仮

¹ フィリップ・ラクー＝ラバルトとの共著。Philippe Lacoue-Labarthe/Jean-Luc Nancy, *L'absolu littéraire*, Seuil, 1978.

定のもと、論を進めていく。まずは『コルプス』における言語というテーマの重要性を確かめ、この著作の身体論における言語というものの取り扱いを検証する。それゆえ、はじめは身体という主題の領域における言語についてのナンシーの思考を検証することになるが、後半では、むしろそれが逆転しているかのように、言語という主題の領域における身体について語るナンシーの記述を論じていくことで、ナンシーにおいて身体と言語というテーマの領域は不可分であることを検証する。そのために、『コルプス』以外のいくつかのテキストも参照し、ナンシーの語る身体、言語を論じていくこともおこなう。

1. 身体とエクリチュール

本論に向かう前にナンシーの哲学全体における身体論の位置づけについて、すこし確認したい。ナンシーという哲学者において、身体論というものは、とりわけ『コルプス』以前は、目立つ議論の項目ではないといえる。さきほどあげた身体を取り扱う著作としてあげた『エゴ・スム』においても、基本の文脈はデカルトをめぐる「エゴ」、主体についての議論が主であり、身体というテーマが前面に出されているというわけではない。しかしながら、ここでひとまず指摘しておきたいのは、ナンシーによって身体が問われる場面について、である。ナンシーは同著作において、共約不可能な思惟と延長、ここでは思考と身体に関して、「口」というものに強調点を論じている。

「口は「エゴ」の開かれであり、「エゴ」は口の開かれである。そこで起こっているのは「エゴ」が自らを空間化するということである」²と述べられている。簡易にまとめてしまうならば、ナンシーは、思考を言表するさいの場としての、たとえば「我レ在リ」ということばの生じる開かれとしての口に着目しているのである。曰く、「開口は、わたしにおいて自らを形成し、自らがわたしであると経験的に知り、自らをわたしであると思考する。わたしは、わたしを作りながら——わたしと言いながら——自らに触れ、自らを固定する」³。『エゴ・スム』についての言及はここまででとどめたいが、ここで強調しておきたいのは、『コルプス』以前において、たとえばデカルトや主体といった主題のもと、身体という項目が登場する際に言語という項目が絡み合っているということである。ナンシーにおいては初期から身体というテーマと言語というテーマは密接に関わっているということを確認しつつ、このさきの議論を進めていきたい。

ここから改めて『コルプス』について論じていきたい。まずここでは『コルプス』のなかで身体と言語というテーマが絡み合っていくまでの、身体論が言語の問題へと踏み込んでいく道順を、おおまかに、追ってきたい。

様々な側面を含みこみ、様々な顔をもつといえるこの『コルプス』という作品において、まず正面から見たときのおもむきは身体論であるといえる。しかし、ナンシーが最初にテーマにあげるのはとあることばについてである。『コルプス』の最初の場面は（キリスト教の）聖体拝領における、「これはまことにわたしの体である（Hoc est enim corpus meum）」ということばから始まる。

² Jean-Luc Nancy, *Ego sum*, Flammarion, 1979, p. 162.

³ *Ibid.*, p. 157.

なぜナンシーがこのことばから始めるのかという、それはこれが以後の（西洋の）身体に関する思考のひとつの源泉となっているとみられるからである。ここに肉体を「魂の牢獄」と考えたプラトン哲学も流れこむことになるのだが、靈魂や精神、知性とくらべて劣ったものとみなされる身体、という図式の思考が西洋社会に流れ出すと考えられるのである。ただし、ナンシーによれば、それだけでなく、つまり物質的で低位な身体という思考が生まれただけでなく、「神の体」、絶対の一であるものの体、という考えが発明されているのだという。西洋の身体像には、まがいものの人間の身体という像だけでなく、その裏に同時に絶対のひとつの身体という理想があり、あるいは絶対の一者がひとつの身体をもつという考えがあるのだとナンシーは指摘している。そのような絶対のひとつの身体が考えられているからこそ、いくつもの身体があるということがすでにまがいものの証左であり、すなわち同時に人間のばらばらで不完全な身体という考えもうまれると言える。（Cf., *Corpus*, pp. 7-8）ナンシー曰く、「身体は彷徨い、欠片となった確信である。古くからのわたしたちの世界にとって、これほど固有なものはなく、これほど異質なものもない」（*Ibid.*, p. 9）。

聖体拝領のことばにならえば、人間が「ある」といえるのは神の似姿たる身体をもつがゆえ、しかし「まことに」「ある」と言えるのは（神の）ひとつの身体である。つまり、人間が人間であるところの固有の身体は、本来は唯一で絶対の身体のはずであり、人間が持ちうるものがないものである。それゆえ、固有なものであり、同時に異質なものである、とナンシーはいうのである。「わたし」において身体そのものはけっして「わたしの」身体としては生起しない——真にありうる身体は「わたし」のものではなく、「わたし」にとって異質のものである。「まことにわたしの体である」というとき、身体はそこではけっして生起しない——それは「ことばの外で」場を持つ⁴、つまり身体は「書き出される *excrit* (*ex-crire* 外部に刻印される)」（*Ibid.*, p. 9）。人の身体は人を超えたものからの贈りものであり、それゆえ各人にとってはこのうえなく近くにまで差し出された縁遠いものである。ここでのナンシーの議論を安易にまとめるならば、キリスト教の身体観からナンシーは身体というものについて、ことば（パロール）として語られる（発話される）身体と、外に書き出されてしまったもの、いうなればエクリチュールとしての身体、という二重性を見出している、といえよう。

ここでナンシーは単にキリスト教への批判をしているわけではない。そのキリスト教の伝統の構造を暴きながら、そのうちにある思考のモチーフを再び見直すことで、身体への思考の別のアプローチを考えているのだといえる。具体的にはここでの一であったはずの複数の身体、そして自身に固有でありながら異質な身体、ということ再思考しているといえる。本来ネガティブにとらえられてきたとみられる側面、複数性や異質性、を否定せずに、両義的なものとして再考している、といえるだろう。

そのうえで、ナンシーが問題にするのはやはり言語である。「これはまことにわたしの体である」

⁴ 原語は *avoir lieu* であり、ナンシーは「生起する」ということ、何かが生じることを「場をもつ」という意味ももつ語を用いている。

と発せられたことば parole⁵とその外に書きだされる身体をあるひとつのエクリチュールとして考えていくのである。

ここでナンシーが身体をあるエクリチュールとするのは、声にだされた福音としてことば（パロール）に対応させているわけではあるが、ここでのエクリチュールは一般的なエクリチュールという語の用法からはすこしかけ離れているかもしれない。では、ナンシーの用いる「エクリチュール」とはどのようなものなのだろうか。

「書くこと、すなわち限界に触れること」（*Ibid.*, p. 12）と述べるように、ナンシーにとってのエクリチュールは外に向けて一ただしあくまでその限界において一あるものである。『コルプス』におけるエクリチュールの定義を引くならば、「「エクリチュール」が言わんとするのは、意味作用の証しや論証ではなく意味へと触れるためのひとつの振る舞いである。触れること、触覚 tact、それはひとつの差し向け adress のようなものである」（*Ibid.*, p. 19）と述べられている。別の個所のことばを借りつつ補足するならば、エクリチュールは、書き手にとってそれはその人の書いたものではあるが、書き出された以上その人の外へ向けられたものである。そして、それは何かを表したものの跡、何かを意味するものの証拠というよりは、意味へと至るまでのプロセス、触れて感覚が生じるように（外へと送り出された）言語が意味を生じるまでの接触を、エクリチュールとナンシーは呼んでいる。ナンシーにとってエクリチュールは仕種、振る舞いなのであり、「わたしの知る限り、触れないエクリチュールなどない」（*Ibid.*, p. 15）、というように、つねに接触あるいは触覚として語られている。刻まれた（書かれた、あるいは印刷された）文字も、あるいはディスプレイに表示される文字だとしても、本を開く、ないしデータファイルを開く、という接触（この場合、「目に触れる」、あるいは「視線が接する」などと表現することもできるだろう）がなければ、読み手にとっても、書かれたものにとっても、エクリチュールとして存在しないといえる。

つまり、ナンシーにおいて、身体はエクリチュールになぞらえて語られているだけでなく、エクリチュールのほうも身体のもちーフをもって語られているといえる。

2. 意味と身体

ナンシーは身体をエクリチュールのほうへ接近させ、エクリチュールも身体のほうへ接近させる表現でもって書いている。さて、『コルプス』におけるエクリチュールについての言述は一旦確認してきたが、あらためて身体についてここでナンシーはいかように述べているかを確認していきたい。触れないエクリチュールはなく、つまり身体として振る舞えないエクリチュールは存在

⁵ ナンシーにおけるエクリチュールに関しては後述するが、パロールについてはここで補足しておく。ナンシーは別の著作にて以下のように語る。「ことば parole は喉から（中略）「出る」のではなく、口の連接のなかで形成される。それゆえ、ことばはコミュニケーションの手段ではなく、——沈黙に至るまで——コミュニケーションそれ自体であり、露呈である。」さらにつづけて、「口が語るとは、[中略] 諸々の他の特異な場に対するあるひとつの特異な場の鼓動である」（Jean-Luc Nancy, *La communauté désœuvrée*, Christian Bourgois, 1999, p. 77）と述べている。ナンシーによれば、ことば（パロール）は、コミュニケーションのツールなのではなく、それ自体である、つまり媒介ではなく、それ自体が働きをもつ運動なのである。

しないということである以上、エクリチュールは身体でありうるだろうが、はたして、身体はどうか。続けて、ナンシーが身体、言語、エクリチュールについて以下のように述べている箇所がある。「[エクリチュールにおける] ある交差、ある途絶、あらゆる言語に対するこの[身体の] 不法侵入、そこにおいて言語は意味に触れる」(Ibid., p. 21)。ここでは身体の侵入において言語が意味に触れるということが書かれているが、これについては、ここからこの「途絶」や「意味に触れる」について注目しながら議論を進めていきたい。

エクリチュールとしての身体、あるいは身体としてのエクリチュール——このような絡み合った表現によって、『コルプス』という著作は冒頭で述べたように、身体と言語という二つのテーマが(そのうえ他のテーマも)絡み合っ書かれ、一筋縄ではいかない複雑怪奇な論の展開をみせる。そして、その絡み合いのなかで、(前節でも確認されたが)特に重点的に語られるのは意味 *sens* についてである。

たとえば、あるいは身体をめぐるキリスト教に関するもうひとつの観点としてあげられる、「受肉 *incarnation*」に対する批判においても、言語と身体の問題の絡み合いにおける争点は意味についてである⁶。「最初に言葉(ロゴス)が存在した」、そして「言葉は肉体となった」、後者の文言にはおそらく言葉が肉体をうむと同時に肉体が言葉を実現されるという相互的な関係がみいだされるはずであるが、「受肉」という考え方においては、言葉の絶対の先行性ゆえに、一方通行の関係(ナンシーは「父子」あるいは「親子関係」と呼んでいる⁷)が固定化されてしまっている。言語と身体は互いに作用しあい、意味あるいは意味の生起が相互的にやりとりされるはずが、この「受肉」という考え方においては身体(あるいは物質化された言葉)はただ意味がとおりぬけていくような記号になる。ナンシーはこのように「受肉」を批判的に分析しているが、ここでの批判は意味について重点が置かれている。

ところで、ここでの、というよりもナンシーのテキストにおいての、*sens* という語はほとんどつねに複数の含意をもって用いられている。単に「意味」だけでなく、(ここでは身体と関わるゆえに特に)「感覚」という含意、あるいは「方向」としての意も含ませられている(前節で「外(に) *ex-*」、「内(に) *in-*」が重要な論点となっていたことから確認できるだろう)。これまでは、エクリチュールとして語られる身体(あるいは身体として語られるエクリチュール)について確認してきたが、ここからは *sens* という語に関わる身体の記述について確認していく。

これまでの引用をみても、ナンシーにおける「意味」は「触れる(触れられる)」ものとされていることがわかる⁸。これは *sens* という語における「感覚」、「方向」という別の意から、触覚のモチーフで「意味」というものが語られているといえるだろう。また、そのような別の意をも

⁶ Cf., *Corpus*, pp. 57-58.

⁷ *Ibid.*, pp. 57-58.

⁸ 以下の既出の引用のことである。「[エクリチュール]が言わんとするのは、意味作用の証しや論証ではなく意味へと触れるためのひとつの振る舞いである。触れること、触覚 *tact*、それはひとつの *adresse* のようなものである」(Ibid., p. 19)。

つ語であるからこそ、意味と身体は切り離して語ることはできないといえよう。また、エクリチュールが意味へと向かうものと考えられ、それが意味へと「触れる」ことと表現されていることから、身体がエクリチュールとして、エクリチュールが身体として語られるのは「意味」をめぐるものであるといえるだろう。意味についてナンシーは次のように述べている。

最終的に、あるいはまず始めに、自らの限界上で漂うことになるのは意味それ自身である。そしてこの限界こそが身体である。(Ibid., p. 22-23)

意味というものは、「最終的に、あるいはまず始めに」限界の上で生じる、あるいは場をもつのであり、その限界が、つまりは意味が生じるその場が身体であると述べられている。

ところで「限界はそれ自体、触れることである」⁹と述べるナンシーにとって限界とは触れることと同義であり（もちろんそこに触覚ひいては身体がモチーフとして考えられているのだが）、何かに触れるあるいは到達する際の場となるものを限界と呼んでいる。ナンシーにおいて、限界とは必ずしも到達するものではない——いいかえるなら、到達する対象・目的ではない。それはすでに（どこかに）あって、（そこへと）目指されるもの、ではなく、そこへ至ったときに、そこが限界なのである。限界というのは到達してはじめて限界としてあらわになるといえよう。ここで改めてナンシーにおける触覚、触れることについて確認するために、同時期の著作、『ミューズたち』から次の記述を引用する。

触覚とは、感覚全体の、そしてあらゆる感覚のタッチ *touche* に他ならない。触覚とは、感じられ、感じている、諸感覚の官能性そのものである。しかし触覚それ自体は自らが触れているのものによって、かつ自らがそれに触れているからこそ、触れられるのだから、感覚として、したがって感じていると自ら感じている限りにおいて、そしてさらには感じられていると自ら感じている限りにおいて、感性的な外在性に固有の契機を示し、その契機をそのものとしてかつ感性的なものとして提示する。触覚をなすのは「触れられることの触覚、触れられることとしての触覚を構成する、あの中断」である。触覚とは触覚の間隔、その異質性である。触覚とは隣接する隔たりである。触覚は感じさせるもの（感じることは何であるか）を感じさせる。つまり、距離の隣接性、親密なものの隣接を。¹⁰

触れるということは、あちらの限界に対して、こちらの限界が到達して成立するわけであり、こちらではなくなつた中断と、あちらではなくなつた中断とが接することである。それゆえナンシーは、中断が触覚をなし、触覚とは隔たりである、と述べる。（こちらないしあちらの）限界がなければ、触れることは起こりえないし、また触れることがなければ、限界は露呈しない。ゆえ

⁹ Jean-Luc Nancy, *La communauté désœuvrée*, Christian Bourgois, 1999, p. 96.

¹⁰ Jean-Luc Nancy, *Les Muses*, Galilée, 1994, p. 35.

に限界とは触れることと同義なのである。内と外、というようになにか異質なものに触れるときにその境界線が限界として露わになる。たとえば皮膚は身体の表面のことであるが、それが身体の外部へと晒されているときにこそ身体の限界といえる。異質なものに対して晒される時、すなわち他なるものに「触れる」時、皮膚は身体（あるいはその持ち主）にとって限界として露わになる。

ナンシーは、意味が意味としてありうるのは限界において、つまり、意味が何かに触れる、何かにとどくときにこそ意味たりうる、と考える。「最終的に、あるいはまず始めに」と述べられているように、意味は結果として最後には何かに到達し触れるものであり、少なくとも意味が生じるにはまず限界、すなわちどこかに触れることがあるはず、なのである。身体的体験における接触であれ、あるいは概念との抽象的な遭遇であれ、何かに触れること、至ることが意味の生起における契機であるといえよう。そして、触れられる場、あるいはその場としての限界が身体というものであるとナンシーは語っている。ここでのナンシーは、意味が生じるには触れること、ひいては身体が必要である、と述べているのと同時に（というよりは、むしろ、と付け加えるべきかもしれない）、意味が生じる限界、すなわち生じるその場にあたるものこそが身体とよばれるものだと述べているのである。ゆえにナンシーは以下のように続ける。「[身体とは] 意味への単なる外在性としてでもなく [中略]、それゆえ最終的には「身体それ自体」としてではなく、まさに「意味の身体」としての身体なのである」(Ibid., p. 23) と。

ここでは、身体とよばれるものは意味にとっての場として語れているといえる。では、ナンシーにとって身体とは、意味あってこそその身体なのだろうか、または、あくまで場として意味を媒介するのが身体なのだろうか。しかし、ここでいわれている場は、単なる媒介として語られているのではない。身体は意味を媒介するものとして語られているのではなく、むしろナンシーは「意味の終焉」(Ibid., p. 23) なのだという。それは、sens を、すなわち意味であり方向を、一何度も用いられている限界という語が示すように——途絶するものなのである。すなわち、身体とは意味を媒介するものではなく、意味(方向)を遮断するものである。中断、途絶させるものとして身体があるのであって、意味がそれ自体だけで身体を身体たりうるものとしているというわけではない。「だからこそ、身体は意味する次元に先立つのか遅れるのか、その次元に対して外部なのか内部なのかを言うべきではない——それは限界にある」(Ibid., p. 24) とナンシーは述べている。そしてナンシーは身体について改めて以下のように述べている。

身体は「意味するもの *signifiant*」でも「意味されるもの *signifié*」でもない。それは露呈するもの／露呈されるもの *exposant/exposé* である。(Ibid., p. 24)

「意味の身体」として、意味が接触する場として身体は語られていたが、それはいわゆるシニフィアンでもシニフィエでもない、つまり意味作用に関わるものでない、ということである。さきほども述べたように意味を遮断するものが身体なのであり、意味が到達する限界が身体なのである——あるいは限界として身体がある——が、身体「が」(主体的に) 意味を中断させるのでは

なく、それはあくまで限界であって、意味にとって（意味の）中断以上のものではない。身体はその中断を露呈するもの、あるいは中断として露呈されるものでしかない。また、ナンシーによって（スラッシュをもって）同時にあらわされているのは、意味か身体か、どちらかが先行するものであるとか、どちらが主体的であるとかが問題なのではなく、それは同時に露呈する／露呈されるためだからであると考えられる。付け加えるならば、身体が（ここでは意味にとって）何かをなすとは言わないナンシーは身体が「もの」であること、身体の物体としての側面を忘却することはないのである¹¹。

これまで意味をめぐる身体について議論し、ここでは意味にとっての限界としての身体、あくまで露呈するもの／露呈されるものとしての身体について確認してきた。ナンシーによれば、意味にとって身体とは、こういつてよければ、立ちふさがり限界なのである。あるいは隔たりという言い方もできるだろう。では、あらためて、言語にとって身体とはいかなるものなのだろうか。節の冒頭の引用において「あらゆる言語に対するこの〔身体の〕不法侵入¹²、そこにおいて言語は意味に触れる」と述べられていたが、あらためてこの箇所を解釈するならば、言語に身体という隔たりが侵入することで、つまり、中断・途絶が差し込まれることで、言語において意味が生じる契機となる、と考えられる。言語のなかへ、身体そのもの、あるいは身体による体験、感覚ないし行為が入り込むことで意味の接触が分裂して起こるのだと考えられる。あるいは同時に、そのような意味・感覚が生じる隔たり、途絶の場として身体が見出される、といえるだろう。言語は身体なしではその意味を生起しえないし、また身体も言語ぬきでは露わになりえない——ゆえに、ナンシーの哲学において、言語とは身体なしには語りえないものであり、同時に、身体とは言語なしには語りえないものなのである。

結びにかえて

これまでナンシーの身体論における言語と身体について、意味をめぐる議論をみていくことで、言語と身体が互いに必要不可欠なものであり（どちらかが優位であるということもなく）、それぞれが先行していたり欠いていたりすることなどなく、同時にしか語りえないと考えるナンシーの

¹¹ 本論ではナンシーの身体における物質性の強調は立ち入らないこととするが、この点に関しては以下に詳しい（柿並良佑「ジャン＝リュック・ナンシーの身体論：『コルプス』読解を中心に」、『立命館言語文化研究』、2015）。また、身体と「主体」についてナンシーは以下のように述べている。「「身体」とは対象をもたないことの主体であり、すなわち主体でないことの主体、「発熱の発作に罹りやすい *sujet à* 」という言い方をするように、主体でなくなりやすい主体である」（*Corpus*, p. 84）。つまり、運動性をもつが、（動詞は対象をもつが）身体自体はそのつど対象をもたないゆえに、主体でありつつ主体ではない状態でもありうるものである。身体と主体に関してはナンシーにおいて『エゴ・スム』より一貫して論じられてはいるが、これ以上本論では立ち入らない。もしくは、『コルプス』における身体とその人称性については次の論文に詳しい（伊藤潤一郎「身体の奥底で——場としての自己と二人称——」『思想』二〇二一年第十二号、2021）。

¹² 「身体は言語に浸透できない」（*Ibid.*, p. 51）とも述べられており、入り込めないものであるはずのある意味では異物であるからこそ不法な侵入という語が用いられているのだろう。

哲学を論じてきた。『コルプス』という著作は概して身体論という輪郭を有してはいるが、そのなかに言語というテーマが軸として見出せるといえる。ここでの言語という軸はナンシー哲学全体、つまりそれ以前の著作における言語についての彼の思考とも通じているだろう—たとえば、『エゴ・スム』における主体と言語について、『無為の共同体』における共同体と言語について、という点から。あるいは、ナンシーのそれ以降の身体やダンスなどを含めた芸術論やキリスト教の脱構築などといったのちのテーマにも通じているだろう。それゆえ、一見ナンシーの著作のなかでも一際特異にみえるこの『コルプス』という著作は、それまで八十年代までのテーマと、九十年代やそれ以降のテーマとの、一種の結び目、それも非常に複雑な形での結び目ともいえる。思えば、ナンシーはこの著作において、身体をというものが生じるのを意味や接触の連関のなかの網目においてだと考えていたが、このことは『コルプス』という著作と、ナンシーの執筆活動全体とにおいても同じように言えるのかもしれない。ナンシーは『コルプス』の最後の場面において次のように述べている。「ひとつの身体とは、ほかの諸身体へと捧げ、さらされたイメージであり、さまざまなイメージのコルプスは身体から身体へと張り巡らされている」(Ibid., p. 105) と——そして、この後にはさまざまなイメージが列挙され、最後に、まるで呼びかけるように、「そしてわたし、ときみ」という語でこの著作は締めくくられている。つまり、『コルプス』という著作自体がさまざまなイメージ、テーマが散りばめられたネットワークのようなものであり、またそれらのひとつひとつの糸を紐解けば他の著作へと、線は続いており、また大きなネットワークを織りなしているといえよう。あるいはそれは、ナンシーのいう「きみ」、つまり読者をまきこむ連関でもあるといえよう。そして、今もなお呼びかけ続けるのだろう、『コルプス』は、ナンシーは、「きみ」へと。